来ない。「精写」とはいうものの、銅版技術の幼稚さだけではなく、銅版の時代が既に過ぎようとしているのが感じられる。楠山の店は明治二十三年頃に廃業してしまうが、建物は関東大震災で灰燼に帰すまで残っていたといわれているが、その建築物を見てみたいものである。

本書には楠山の店舗を含めて九十八件の店舗・工場が掲載されている。その中に伝統的な各種飲食店等に挟まれて、浅草公園地の「写真所　江崎禮二」〔図10〕や麹町区富士見町の「写真師　塚本揚東」〔図11〕、「造靴場」依田西村組、「靴製造所」弾直樹、「牛肉卸商」冨士山藤次郎といった、明治以後に開業した諸職が入り交じって掲載されているのも時代の雰囲気を色濃く反映している。

本書のことを書いている間にも「趣味の古書展」（平成二十一年七月十七・十八日、東京古書会館）の目録で注文した『浪花諸商独案内』（編輯兼出版人杉岡政治、明治十二年五月二十一日御届／同　六月　出版）と、森琴石の経営する響泉堂の銅刻になる伴源平編輯『大阪名所独案内』（二冊、明治十五年二月四日版権免許／同年　三月　出版）が、文学堂書店から送られてきた。後書に関しては大阪市立近代美術館準備室の熊田司氏等によって『大阪日日新聞』に「森琴石と歩くおおさかの町」として連載され、それが最近、『森琴石と歩く大阪　明治の市内名所案内』（熊田司・伊藤純編、東方出版、二〇〇九年八月）という一書に纏められた。

これらの諸本には新潟・柏崎にある黒船館の館蔵印が押されたり、川上澄生の手になる蔵書票が貼付されていた。やはり近年では「禁出門　治三郎文庫」という朱肉の蔵印が大胆に押された摺り物や蔵書を、古書市や古書目録でよく目にする。「いんさつ明治百年」（日本印刷新聞、昭和四十一～四十三年）等を著わした印刷史の研究者、牧治三郎氏の収書である。収書と散書、集まればまた散る、ことほど左様に集まる時は集まって来る。これもまた縁というものであろうが、そう遠くはない将来、果たして私の収書はどのような運命をたどることであろうか。

並べてうたかたなる――印刷資料諸々

森　仁史

我らが足繁く通う古書展には、本ばかりでなく様々な印刷物――版画、刷り物から出版広告、印刷見本やら――が並べられる。近頃はアナログ・レコードからヴィデオテープ、DVD、はては手拭、金属容器にまで及び、その品揃えは書店と来場者の需給を受けとめ、時代の移り変わりを映しながら次第次第に移り変わっていくものなのであろう。今回は家蔵資料からかつての最先端のありさまを明かしているものを少し紹介したいと思う。いずれも多少印刷と写真とに関わる資料であるが、古書展のうたかたから掬い上げられた一端である。

引札「石版亜鉛版写真版製造販売所　小山纍山堂」　京都市三条通柳馬場角　四〇・二一×三〇・四cm　年不祥〔図1〕

引札は通常美濃紙半切（ほぼB4判、二五・七×三六・四cm）に印刷されるものなのだが、これより一回り大きなサイズであり、しかも縦に紙を用いているて

1　引札「石版亜鉛版写真版製造販売所　小山纍山堂」

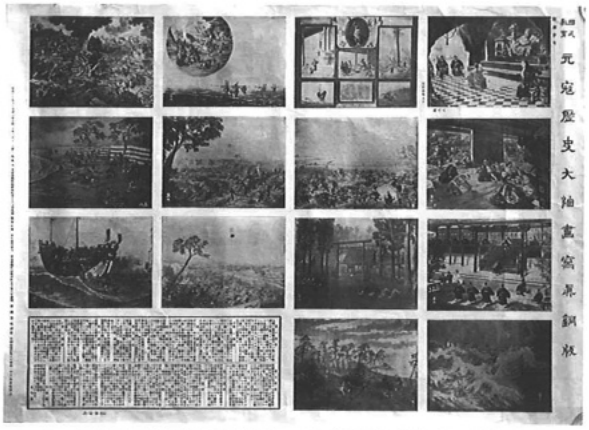
んでも通常とは異なっている。本資料の用紙はかなり厚目であり、これは紙幣寮が明治前期に開発した局紙に近い上質な紙のように思われる。右側は写真版石版、左は網目版石版と注記されている。前者は森寛斎の山水画を撮影したものである。手描き製版では出来上がりと左右を逆に描かなければならないが、転写技術が知られると、手描きだけでなく写真も応用され図版印刷の手段として普及した。本資料の左側図版は確かに全面が網目で製版されているが、大半は手書きの網目版であり、これではかえって製版に手間がかかってしまいそうであるし、網にすることによって何か特別な印刷効果が表れているわけでもないようである。小山槃山堂とは本誌第二号に森同人が紹介された小山三造の経営していた印刷所であると、筆者ご本人から教示頂いた。また、資料中に印刷されている和歌の干支から明治二十九年（一八九六）のはずだとも教えて頂いた。また、塚原晃によれば、本資料は明治二十四年に製作されたコロタイプによる京名所図と同じ住所であり（『描かれた明治ニッポン』研究編、二〇〇二年）、京都における草創期の石版画の歩みにとって興味深いもののようである。

湯地丈雄編「国民教育　元寇歴史大油画写真銅版」　護国堂　明治三十年（一八九七）十一月二十六日　印刷所　小川写真製版所　三九・三×五四・七cm〔図2〕

本資料は矢田一嘯（一八五八―一九一三）によって制作された十四点の元寇の図を紹介したもので、同じ作者による鎮西身延山本佛寺所蔵作品を中心にして、「よみがえる明治絵画」展（福岡県立美術館、平成十七年）が開催されたので、ご記憶の方も多いかと思う。本展図録を参照し少し解説すれば、編者の湯地丈雄（一八四七―一九一三）は熊本の人で、熊本県警部を務めたのち、明治二十年頃より元寇記念碑の設立に奔走した人物である。

本資料は第一から十四まで白抜きで番号が付された各八・五×一一・五cmの図版とそれぞれの説明文から成り、図は右上から左へ並べられている。ただし、三番目と四番目はともに「第四」と記入されている。説明の末尾に、明治二十三年十二月十七日付の宮内省からの下賜金の文書が転記されている。また第一図の下辺に「原図各縦七尺」「横九尺」と記されている。これは現在靖国神社遊就館に所蔵されている矢田作品に該当する大きさである。

湯地は明治二十九年一月熊本を皮切りに、全国各地で演説会を開催し、このとき元寇の図十四枚を携行したと記録されているから（仲村久慈『湯地丈雄』牧書房、昭和十八年）、本資料はこの全国巡回に際して作成されたものと思われる。この頃、高松市に在住した菊池寛少年は湯地の演説から「国防の大切」を、これらの絵を目にして「蒙古の残忍」（「話の屑籠」昭和十八年七月）を心に刻まれ、山本五十六元帥戦死に触発され回顧している。さすれば、湯地の意図はしかと伝わったとしていいだろう。



2　湯地丈雄編「国民教育　元寇歴史大油画写真銅版」護国堂　明治30年

本資料と同一の図版は「元寇」と題された軸装作品（福岡市博物館蔵）に掲載されており、ここに印刷された十四点の図版は描かれた内容が家蔵の資料と同一であり、各図版の数字の位置も全く同じなので、撮影された油絵は同一と考えてよいと思われる。ただし異動はあり、右記の三、四図の数字の間違いは訂正されているのと、最初の二枚の順序が入れ替えてある。この資料は明治三十七年（一九〇四）福岡市に「亀山帝御銅像」（現同市東公園に現存）が建てられた後、この十四枚の油絵が明治四十年遊就館で公開されていた頃に製作されたようであり、その後油絵は同館の所蔵（十一図が現存）となったとされる。これとは別に、湯地は明治四十二年に『元

寇画帖」を発刊しており、ここでは家蔵資料と掲載順序は同じとなっている。ただし、説明文には多少の異動がある。

また、「元寇」によれば、矢田はこれら十四枚の作品を十四か月で完成させたとある。作品の規模密度からすれば、相当な制作速度だったと思われる。矢田はこれ以外に少なくとも四度元寇をテーマとした連作を制作しており、福岡県立美術館の図録によれば、明治四十二年（一九〇九）《蒙古襲来絵図》（本佛寺蔵、全十四図）、明治四十三年《壱岐国元寇歴史画》（壱岐神社蔵、全三図）、同四十四年元寇記念パノラマ館、年不祥《元寇戦闘絵図》（元寇資料館蔵、全十六図）であった。このように同一の作家が同一のテーマを長期わたって描き続けるということは日本では稀有であろうし、矢田の絵画観を物語っているように思える。これらが日露戦後の三年間に集中していることは国民意識のたかまりと無関係ではありえないだろう。

矢田は奇しくも大正二年（一九一三）、湯地丈雄と同じ年に病没したが、生前から指導し慕われた博多人形師の組織、博多塑像研究会の手によって大正六年に「矢田一嘯先生記念展覧会」が開催された。しかし、戦争をはさんで昭和三十六年（一九六一）福岡県有形民俗文化財に指定される五十年間ほどは忘れられていたようであり、先述の福岡県立美術館による展覧会が美術界への再生となった。

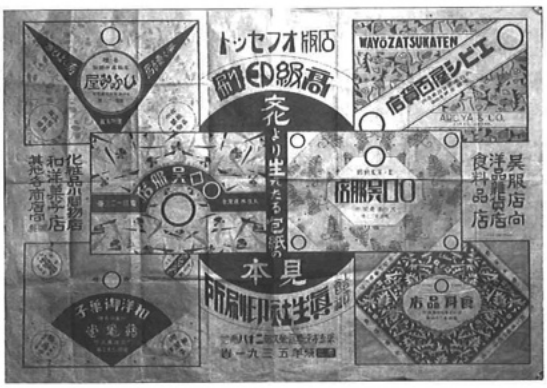
注目したいのは写真銅版という印刷技法である。これは明治二十七年（一八九四）小川一眞（一八六〇―一九二九）がアメリカから導入した製版技術で、同年八月に創刊された『日清戦争実記』（博文館）は口絵にそれまでの木版に替えて写真銅版を採用し大評判となった。本資料で見ても、以後に登場する写真網版よりははるかに細かな網目による印刷であると分かる。湯地がこの製版を小川一真のスタジオを担当させているのは図版の印刷仕上がりをより高精度にするために新技術をいち早く採用したかったのであろうか。小川は黒田清輝と同じ明治四十三年に写真家として初めての帝室技芸員に選ばれた人物である。

「写真亜鉛凸版見本」写真製版所　猶興舎、特約引請所　泰錦堂

四八・〇×三一・〇cm　年不祥〔図3〕

『七十五年の歩み―大日本印刷株式会社史―』によれば、猶興舎は参謀本部測量局製図課の堀健吉が佐久間貞一の援助を得て、明治二十三年（一八九〇）に亜鉛写真版の製版を業務とするため設立した工場で、泰錦堂は秀英舎（のち大日本印刷に統合）の石版部門で、この写真亜鉛版の営業窓口であった。本資料には猶興舎の住所が神田区鎌倉河岸としてあるので、同所に移転した明治二十六年以降のものであろう。写真亜鉛版の利用は明治二十三年七月一日発行の『毎日新聞』の付録「貴族院議員肖像附小

3「写真亜鉛凸版見本」写真製版所　猶興舎



4「石版オフセット高級印刷文化より生まれたる包紙の見本」真生社印刷所

5　主婦之友写真部《宮城》昭和9年

一寸

第三十九号　二〇〇九年八月

第三十九号目次

新・旧刊案内39
青木繁のスケッチ、土方定一の翻訳書について、近況報告など　青木　茂　1
版元・佐藤章太郎の出版
—京都からの新版画運動—　岩切信一郎　7
行方不明後の《藤牧版画》の足跡（9）
—藤牧版画の後摺りについて17　大谷　芳久　13
近代日本画の構図決定格子（五）
—大観　東京美術学校卒業まで—　金子　一夫　27
小股便利帳
収書から散書へ　銅・石版画遺聞34　丹尾　安典　32
『万国綱鑑録和解』『東京名家繁昌図録　弐編』など　森　登　40
並べてうたかたなる—印刷資料諸々　森　仁史　45
■装幀本談義
和田英作の『小詩園』／岸田劉生の『詩集　南枝の花』　山田　俊幸　48

新・旧刊案内39

青木繁のスケッチ、土方定一の翻訳書について、近況報告など

青木　茂

■今回も本誌先号、先々号の僕の駄文についての跡始末か、げすのあと知恵といったことになりそうである。日本山岳会の機関誌『山岳』創刊号（明治三十九年四月）の三百部限定復刻版が手許にある〔図1〕。昭和四十七年一月に出たのだが、復刊趣旨などが既にない裸本である。表紙の武内桂舟の石版画にも見える東洋の山水画・山水観は西洋の風景画・山岳観よりはずっと古くから成立していたが、日本の若い登山家たちがウェストンを知ることでロンドンのアルパイン・クラブに倣って山岳会を設立するに至った経緯は山崎安治『日本登山史』（一九六九年、白水社）などによって手軽に知られたい。この登山史にも『山岳』創刊号の内容が書き出してあり、女貌山と太郎山（城数馬）、赤薙の一角（五百城文哉）などとなっているが、文哉の初登高記録にはその弟子小杉未醒の挿図が添えてあるとは目次にも出ていない〔図2・3〕。挿絵はいつも、現在も、一人前としては扱われていない。巻頭の写真数葉には撮影者や所蔵者名が出ているのに、である。文哉の一篇は三十六年九月の山行で、文の描けないところを敘している画家未醒によって城数馬に送られたものであ

1 『山岳』創刊号（明治39年4月）